

Workshop for young archaeologists

Date July 23th – 27th, 2018

Time and Venue: TBA

7月23日（月）担当：沢田敦（東北大学）

実験題目：「木材の種類と状態による形成ポリッシュ」と「石器の踏み付け」に関する実験

7月24日（火）担当 青木要祐（東北大学）

実験題目：細石刃の製作実験

目的：日本列島において後期旧石器時代後半期に盛行する細石刃石器群の一部には、細石刃核の甲板面（打面）に擦痕がみられる。擦痕は石器製作者によって意図的に施されたものと考えられるが、どのような意図をもって施されたものかは明らかでない。そこで、擦痕の有無を条件とした製作実験を実施し、細石刃核甲板面の擦痕が細石刃剥離技術にもたらした影響を検討する。

内容：擦痕の有無・石材別に分けて細石刃の製作実験を行う。出土遺物と関連させるため、細石刃の製作技法は湧別技法ないしホロカ技法で行う。石材は黒曜石（北海道白滝産）と頁岩（山形県最上川流域産）を対象とする。

7月25日（水） 担当：舘内魁生、 今西純菜、 早川文弥（東北大学）

実験題目：土器表面の調整実験 — “ナデ” 調整による器面の変化—

目的：“ナデ” は最も基本的な土器の調整方法であるが、実際の資料には様々な“ナデ”の痕跡が確認できる。本実験は特定の条件下で“ナデ”動作によって器面がどのように変化するのかを実験的に明らかにする。本実験の成果は実際の考古資料の観察に応用されることが期待できる。

内容：本実験では含水率・混和材量をコントロールした粘土板サンプル（土器の器面にみたとる）を用意し、これに様々な工具で“ナデ”動作を加える。

7月26日（木） 担当：荒木 昂大（東北大学）

実験題目 古代メキシコの石製食物加工具（メタテ・マノ）の使用実験

目的 先史時代よりメソアメリカに見られる石皿のメタテと石棒のマノは、食物をすり潰

して調理する道具として知られる。本実験では、簡易的に再現したメタテ・マノの使用を通して、石材や形態、加工物ごとにそれぞれ異なると推測されるメタテ・マノの役割を具体的に考察することを目的とする。

内容 長 450×幅 300mm のメタテ 3 点と長さ 300×幅 75mm のマノ 6 点を用意する。これらは気泡の含有率の異なる 3 種類の玄武岩より作成する。またマノは使用面を凸面と平面の二種類を用意する。大まかな加工は発注する石材店に依頼し、大学では微調整を行う。実験中、すり潰す作業は一回につき 1～2 時間程度を目安とする。加工物は、水に漬けたトウモロコシと乾燥させたトウモロコシ、トウガラシ、顔料を対象とする。

7 月 27 日（金）担当：熊谷亮介（東北大学）

実験題目：着柄狩猟具の刺突実験

目的：日本列島東北部の後期旧石器時代遺跡から出土する基部加工ナイフ形石器は、木製柄の先端に装着された上で、刺突あるいは投射狩猟具として使用されたことが推定されている。本実験では、山形県高倉山遺跡や乱馬堂遺跡出土の基部加工ナイフ形石器にみられる破損痕跡とその状況をより具体的な狩猟活動との関連で理解することを目的とする。

内容：実験にあたって出土資料と同質の珪質頁岩を使用した複製石器を製作する。製作は山形県埋蔵文化財センターの大場正善氏に依頼する。20 点の複製石器のうち、10 点を軽量の木製柄（長さ 1.2m、φ 2cm）、残りの 10 点を重量のある木製柄（長さ 1.5m、φ 3cm）に継ぎ柄を介して着柄する。継ぎ柄と複製石器の接着は天然質の接着剤である膠および弁柄の混合液で接着する。刺突対象には牛の肩甲骨・ゼラチン・シカ皮を重ねたものを用意する。